

# ある臨死体験と再会体験の事例—看取り士 柴田久美子氏の事例—

大門正幸

## A Case of Near-Death Experience and Reunion Experience: The Case of Mitorishi Shibata Kumiko

OHKADO Masayuki

### Abstract

There are many individuals who have had near-death experiences that either directly or indirectly led them to take a new path in their lives. Such examples include Dr. Kobayashi Ken, a naturopathic doctor working in the U.S.; Dr. Akiyama Yoshitane, a well-known breatharian lawyer; Dr. Ochi Keiko, a psychiatrist who practices various alternative therapies including past life therapy; Dr. Yasue Kunio, a theoretical physicist and founder of the Kankojiryu-jujutsu based on “love”; Dr. Nishimoto Shinji, who has cured many patients with so-called incurable diseases through a holistic approach. This paper focuses on Ms. Shibata Kumiko as one of those who has forged a new path after a near-death experience. While most experiencers focus on applying their newly acquired knowledge to improving other people’s lives in “this world,” Ms. Shibata is unique because she focuses on supporting those who leave for the “other world.” Ms. Shibata also had a “reunion experience” later in life, which is reported in this paper.

**キーワード：**臨死体験、臨死体験尺度、改訂版人生変化目録、再生型事例、再会体験、  
**Key words:** near-death experience (NDE), near-death experience scale (NDE Scale), life changes inventory-revised (LCI-R), case of the reincarnation type (CORT), reunion experience

### 1. はじめに

臨死体験がきっかけとなって、あるいは淵源となって、稀有な道を歩んでいる人物は少なくない。そのような例として、アメリカで自然療法医として活躍している小林健氏、不食の弁護士として著名な秋山佳胤氏、前世療法をはじめ様々な代替的療法を実践している精神科医の越智啓子氏、理論物理学者で「愛」をベースとした冠光寺流柔術の創始者である保江邦夫氏、多くの難病患者をホリスティックなアプローチで治癒してきた西本真司氏らを挙げる<sup>1)</sup>ことができる。

本稿では、臨死体験をきっかけに新たな道を切り開いてきた一人として、柴田久美子氏を取り上げる。柴田氏がユニークなのは、体験者の多くが臨死体験を通して垣間見た「あの世」に関する知見に基づいて「この世」に焦点を当てた実践を行っているのに対し、旅立つ人をサポートするという「あの世」に焦点を当てた実践を行っている点である。「人生のたとえ 99%が不幸であっても、最後の 1%が幸せならば、その人の人生が幸せなものに変わる」というマザーテレサの言葉を座右の銘とし、余命告知を受けてか

ら納骨までの幸せなエンディングをプロデュースする看取り士という新たな職業を創り出した柴田氏の事例は、臨死体験が持つ大きな力を示す好例であると同時に、その影響という観点からは大変特異で重要な事例だと言えるであろう。また、柴田氏は後に「再会体験」もしており、その点についても報告する。

## 2. 看取り士 柴田久美子氏

柴田久美子氏が2012年に創設した日本看取り士会は、看取り士の養成と派遣を核とし、各種の研修活動や啓発業務を行っている一般社団法人である<sup>2)</sup>。看取り士は、(1) 余命告知を受けた人やその家族の相談を受ける、(2) 臨終の場に立ち会う、(3) 看取りの作法を伝授する、という三つを主な業務とし、幸せな人生の最後を支援する、多死社会を迎えた日本にとって重要な役割を果たす職業である<sup>3)</sup>。

柴田久美子氏は、1952年、三人の姉と一人の兄に続く四女として、出雲にある14代続く農家に生まれた<sup>4)</sup>。出雲大社教の教えを信仰し<sup>5)</sup>、2礼4拍の出雲大社式参拝から朝が始まる氏の実家の大国家では、大祭礼の朝に四女として誕生した氏は「巫女の到来」と捉えられ「くみこ（来る巫女）」と名付けられた。氏に霊的な感性が備わっていることに気づいた祖父と父は、氏に対して「将来は出雲大社の巫女になるように」と言い続け、出雲大社教の教えに沿った教育を施した。そのため幼稚園に通うことは許されず、遊び相手のいなかった氏は自然と戯れることが多くなった。そのこともあってか霊的な感性が磨かれた氏は、親戚が来ると、そばにいる霊的な存在を指摘したり、叔母に起こる未来の出来事を予知するようになり、やがて駄賃をもらって大人の「相談」を受けるようになった。最初は喜んで「鑑定」を続けていた氏であったが、突然、このようなことを続けてはいけなく感じ、それ以降は寡黙な少女となった。特異な環境で育ったこともあって、小学校入学後も周りとは打ち解けることができずにいたという。

氏の人生観・世界観に最も大きな変化をもたらしたのは、小学5年生の冬に経験した臨死体験であった。その内容については、3節で述べることにする。

氏が小学6年生の春、最愛の父親が他界した。たくさんの人々に囲まれ、一人一人にお礼の言葉を述べた後、最期に氏の手を握り締め「ありがとう、くんちゃん」と微笑みながら旅立っていった父親の姿は、死は悲しいだけのものではないこと、それどころか大きな感動を与えるとても尊いものであることを、氏に実感させた。この体験が現在の氏の活動の原点となっている。

出雲大社教の信仰の中で育った柴田氏であったが、出雲から出たいという思いが募り、高校卒業と同時に家族に相談もせずに「海外に行きたいから」という理由で大阪YMCAの秘書課に進学した。在籍時に読んだ藤田田氏の著書『世界経済を動かすユダヤの商法』（藤田, 1972）に感銘を受け、公募されていた日本マクドナルドの社長秘書に応募、100人ほどの応募者の中から選ばれ、1973年、日本マクドナルド株式会社の社員となった。社長秘書を数年務めた後、店長となり、担当した店舗を最優秀店舗にまで育てて藤田田賞を受賞するなど大きな業績を上げ続けた。しかし、必死に働く中でやがて心身のバランスを崩し、1989年に退社、その後、東京で自営のレストランを開いた。

1993年9月、柴田氏は家庭の事情で九州に移住して新たなレストランを経営していたが、ある日の夜、ベッドに横になりまどろみかけた時、突然「愛こそが生きる意味だ！」

という声を聞いた。同時に、足元に白い光が降りてくるのを見た。声の主はわからなかったものの、天に「お金のために働く生活」に見切りをつけるように促されたと感じた氏は、小学6年生の時に看取った父親の幸せな最期の姿を思い出し、あちらの世界に旅立つ人たちのサポートをしようと特別養護老人ホームで働き始めた。

1998年、氏は島根県の離島（知夫里島）にある高齢者福祉センターで勤務を始めるが、重介護者を受け入れる施設がないためやむをえず本土の施設に移り、最期を迎える高齢者の姿に胸を痛め、2002年にNPO法人「なごみの里」を設立し、近しい人に見守られながら旅立てる「看取りの家」を開設した。抱きしめて看取る実践を重ねる中で氏は、理想的な看取りの作法を「看取り学」として確立、2012年に「人生の最期の場に寄り添う看取り士」の養成や死に対する意識改革を目指して一般社団法人日本看取り士会を設立し、現在に至っている。

### 3. 柴田久美子氏の臨死体験

本節では、柴田氏が小学5年生の時に体験した臨死体験について記述・考察を行う。

氏は小学生のころ小児喘息を患っており、発作が起こると家族が近所の医者を呼ぶということが繰り返された。氏が臨死体験をしたのは小学校5年生の冬に起こった発作がきっかけであった。

発作の最中にふと気がつく「娘さん、今夜が山ですね」と語る医師と「ありがとうございます」と頭を下げる父親の姿が見えた。視線を移すと、自分の体を抱き「久美ちゃん、この腕の中で（旅立つのであれば、抱いたまま旅立たせてやりたい）」と涙を流す母親の姿が見えた。氏は「お母さん、私は苦しくないよ。大丈夫だよ」と懸命に声をかけたが、自分の声は母には届かず、不思議に思った。

そのうち、氏はいつの間にか雲の上をふわふわと歩いている（漂っている）自分に気づいた。そこは白い光に包まれた非常に心地よい場所であり、肉体の感覚がなく世界と一体化しているように感じられた。その場所で氏は大きな喜びを感じていた。また、そこで誰かの声を聞いた。その時点では発信者も内容もはっきりしなかったが、当時を振り返ると、レストランを経営していた時に聞こえた「愛こそが生きる意味だ！」という声の発信者と同一だったのではないかと、氏は感じている。

心地よい場所ではあったものの、そこに留まることはできないと感じると（氏によれば、そこで聞こえた声が「これ以上進んではいけない」と伝えたかも知れない、とのことである）、朝日の中で自分の体を抱く母親の姿が見え、いつの間にか肉体に戻っていた。なお、この体験以降、氏が喘息の発作に悩まされることは無くなったという。臨死体験によって持病が寛解または治癒した、という事例は多く報告されているが<sup>6)</sup>、柴田氏の事例もその一つであると言えるかも知れない。

#### 3.1. 臨死体験尺度による分析

臨死体験の内容を測る尺度として、信頼性が確立され最もよく使われているものにBruce Greysonによる臨死体験尺度(Near-Death Experience Scale)がある(Greyson, 1983a)<sup>7)</sup>。これは、認知的(cognitive)、感情的(emotive)、超常的(paranormal)、超越的(transcendental)の4つの領域における4つの質問、合計16の質問に「0」「1」「2」の

三段階で回答する尺度である。最低点は「0」、最高点は「32」であるが、7点以上が臨死体験とみなされる。臨死体験尺度を表1に、それぞれの質問に対する柴田氏の回答を表2に示す。

表1. 臨死体験尺度 (Near-Death Experience Scale)

認知的領域 (Cognitive Component)

1. 時間の流れが早くなった、あるいは遅くなったと感じましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 時間の流れは通常より早くなった、あるいは遅くなった
  - 2= あらゆることが一度に生じているように感じた、あるいは時間が止まったように感じた、あるいは「時間」という概念が意味を持たないように感じた
2. 思考の速度は早まりましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 通常より早くなった
  - 2= 非常に早くなった
3. 過去の出来事が思い浮かびましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 多くの出来事が思い出された
  - 2= 意図せず(思い出そうとした訳ではないのに)、出来事が眼前に走馬灯のように繰り上げられた
4. 全てのことが「わかった」(全てのことを理解した)、という気持ちになりましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 自分自身や他の人に関してそのような気持ちになった
  - 2= 宇宙の出来事全体についてそのような気持ちになった

感情的領域 (Emotive Component)

5. やすらかな気持ち、あるいは心地よさを感じましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 解放感あるいは静けさを感じた
  - 2= 非常にやすらかな気持ち、あるいは大きな心地よさを感じた
6. 喜びを感じましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 幸せを感じた
  - 2= 非常に喜びを感じた
7. 宇宙と調和している気持ち、あるいは宇宙との一体感を感じましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 自分は自然と対立した存在ではないと感じた
  - 2= 自分は世界と一体化している、あるいは世界と一つである、と感じた
8. まばゆい光を見ましたか、あるいは光に包まれましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= 非常に明るい光を見た
  - 2= 明らかに神秘的な、あるいはこの世のものとは思えない光を見た

超常的領域 (Paranormal Component)

9. 感覚は通常よりはっきりしていましたか(研ぎ澄まされていきましたか)？
  - 0= いいえ
  - 1= 通常よりはっきりしていた(研ぎ澄まされていた)
  - 2= 通常より非常にはっきりしていた(研ぎ澄まされていた)
10. あたかも超感覚知覚(ESP)を使ったかのように他の場所(自分の肉体のある場所以外の場所)のことが分かりましたか？
  - 0= いいえ
  - 1= はい。しかし知覚した内容が事実かどうかは不明
  - 2= はい。しかも知覚した内容は事実であった

11. 未来の出来事が見えましたか？  
 0= いいえ  
 1= 自分の未来が見えた  
 2= 世界の未来（自分以外の未来）が見えた
12. 体から分離したと感じましたか（体外離脱した、と感じましたか）？  
 0= いいえ  
 1= 体の感覚がなくなった  
 2= 明確に体から離れ、別の場所に存在していた

超越的領域（Transcendental Component）

13. 地上世界とは思えない場所に行きましたか？  
 0= いいえ  
 1= 馴染みのない、知らない場所に行った  
 2= 明らかに神秘的な、あるいは地上ではない場所に行った
14. 神秘的な存在と出会いましたか、あるいはそのような存在を感じましたか？  
 あるいは誰のものか分からない声を聞きましたか？  
 0= いいえ  
 1= 誰だか分からない声を聞いた  
 2= 明らかに神秘的な、あるいは地上のものではない存在と出会った、あるいはそのような声を聞いた
15. 亡くなった人物、あるいは宗教的な存在と会いましたか？  
 0= いいえ  
 1= 存在することを感じた  
 2= 実際にそのような存在を見た
16. 境界線、あるいはこれ以上先に行ったら帰ってこれなくなると感じる場所に行きましたか？  
 0= いいえ  
 1= そのような場所に行き、自分の意思でこちらに戻ってきた  
 2= そのような場所に行ったが、それ以上先に進ことが許されなかった、あるいは戻ってきたくなかったのにこちらに引き戻された。

表2. 柴田久美子氏の臨死体験

認知的領域				感情的領域				超常的領域				超越的領域				
1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9	10.	11.	12.	13.	14.	15.	16.	計
1	2	0	0	2	2	2	1	1	1	0	2	2	1	1	2	20

表2に示すように総合点は20であり、臨死体験としてはかなり深い部類に入る。また、4つの領域の合計は、それぞれ、3、7、4、6であり、感情的領域と超越的領域の色濃い体験であったと言える。

3.2. Life Changes Inventory-Revised

臨死体験者の多くが、体験後に人生観や生き方を大きく変化させることはよく知られている。そのような変化を測る尺度の代表的なものが、Kenneth Ringによって開発され（Ring, 1984）<sup>8)</sup>、Kenneth RingとBruce Greysonによって改訂された改訂版人生変化目録（Life Changes Inventory-Revised）である（Greyson and Ring, 2004）。これは表3に示した50の項目に対して、「著しく増加（Strongly Increased）」、「増加（Increased）」、「変化なし（No Change）」、「減少（Decreased）」、「著しく減少（Strongly Decreased）」の五段階で回答するものである。

表3. Life Changes Inventory-Revisedの各項目

1. 他人を助けたいと思う気持ちは
2. 他人への共感の気持ちは
3. 「日常的なこと」に感謝する気持ちは
4. じっくりと他人の言うことに耳を傾ける力は
5. 自分が尊い存在だと思ふ気持ち（自尊感情）は
6. サイキックな現象（超常的な現象）に関する興味は
7. 組織化された宗教に関する興味は
8. 人生のあらゆる側面に対する畏敬の気持ちは
9. 物質的な物に対する興味は
10. 他人に対する寛容の気持ち（他人を受け入れる気持ち）は
11. 他人の苦しみに対する敏感さは
12. 他人に「よい印象」を与えようとする気持ちは
13. スピリチュアルなこと（霊的なこと）に関する興味は
14. より高次の意識状態に達したいという気持ちは
15. 愛情を明確に（オープンに）表現する力は
16. 他人が抱えている問題を見抜く力は
17. 自然をありがたく思う気持ちは
18. 他人と競争しようとする気持ちは
19. 宗教的な気持ち（特定の宗教と結びついた気持ち）は
20. スピリチュアルな（宗教とは結びつかない霊的な）気持ちは
21. 地球環境に関する関心は
22. 人生とは何かについて理解した、という気持ちは
23. 人生における目的の意識は（自分の人生の目的は何かという意識は）
24. 高次の力の存在を信じる気持ちは
25. 他人を理解する力は
26. 人生の神聖な部分に対する感受性は
27. 生活水準を高くしたいという気持ちは
28. 自分を受け入れる気持ちは
29. 一人でいたい気持ちは
30. 自分の人生には何らかの意味が隠されているという気持ちは
31. 家族と関わる度合いは
32. 死への恐怖は（\*逆転項目）
33. 核兵器に対して心配する気持ちは
34. 有名人になりたいという気持ちは
35. 祈る傾向は（祈る回数は増えた／減った？）
36. 「生まれ変わり」を受け入れる気持ちは
37. 他人への共感の気持ちは
38. 環境・生態系への関心は
39. 教会あるいは類似の宗教共同体との関わりは

40. 自分を理解したいという気持ちは
  41. 内なる神が存在する、という感覚は
  42. 傷つきやすさの感覚は（傷つきやすさは）
  43. 死後も生命は続く、という感覚は
  44. 他人が自分をどのように思うか気にする気持ちは
  45. 政治的な事項（政治・政府・市民）に対する関心は
  46. 人生で物質的な成功をおさめたい、という気持ちは
  47. 他人を受け入れる気持ちは
  48. 個人的な意味の探究は（個人的な意味を探究しようと行動することは）
  49. 社会正義の問題に関する関心は
  50. 死や死にゆくことに関係する事項に対する関心は
- 

各設問の回答の「著しく増加」には「2点」が、「増加」には「1点」が、「変化なし」には「0点」が与えられる。一方、「著しく減少」には「-2点」が、「減少」には「-1点」が与えられる。項目32は逆転項目であり、「著しく増加」と「増加」にはそれぞれ「-2点」と「-1点」が、「著しく減少」と「減少」にはそれぞれ「2点」と「1点」が与えられる。尺度の分析は大きく二つの方法で行われる。一つは、絶対値のみを考慮することで体験の全体的な影響を計算する方法で、数値は「0」から「2」の間に収まる。もう一つは、項目または領域内における変化を測るものである。項目6、29、31、36、42については、それぞれが独立しており、「2」から「-2」の5段階で評価される。残りの項目は以下の9つの領域に分けられ、各項目の平均値（「-2」から「2」の5段階）で評価される：「命への感謝（Appreciation for Life）」（項目3、8、17、26の平均）；「自己受容（Self-Acceptance）」（項目5、28、40の平均）；「他者への気遣い（Concern for Others）」（項目1、2、4、10、11、15、16、25、37、47の平均）、「世俗的成功への関心（Concern with Worldly Achievement）」（項目9、12、18、27、34、44、46の平均）、「社会的に／地上で価値あるとされるものへの関心（Concern with Social/Planetary Values）」（21、33、38、45、49の平均）；「（生きる）意味／目的の探究（Quest for Meaning/Sense of Purposes）」（項目22、23、30、48の平均）；「靈性（Spirituality）」（項目13、14、20、24、41の平均）；「宗教性（Religiousness）」（項目7、19、35、39の平均）；「死を受け入れる気持ち（Appreciation of Death）」（項目32（逆転項目）、43、50の平均）。

柴田氏の回答に関する数値を先行研究の Goza et al. (2014) および Schneeberger (2010) における数値と比較したものを表4に示す。ただし、領域として分類されておらず、またいずれの研究においても数値の記載されていない、項目6、29、31、36、42については割愛してある。

表4. Life Changes Inventory-Revisedの集計結果

価値群	本調査	Goza et al. (2014)	Schneeberger (2010)
合計	1.02	1.07 (±0.36)	NA
命への感謝	1.0	0.77 (±1.00)	1.28 (±0.38)
自己受容	0.33	0.50 (±0.79)	1.14 (±0.63)
他者への気遣い	1.3	0.43 (±0.86)	1.22 (±0.53)
世俗的成功への関心	-1.3	-0.25 (±0.57)	-0.48 (±0.53)
社会的に／地上で価値あると されるものへの関心	0.4	NA	0.81 (±0.67)
(生きる) 意味／目的の探究	0.5	0.57(±0.91)	1.17 (±0.63)
霊性 (スピリチュアリティ)	1.2	0.73 (±0.97)	1.16 (±0.70)
宗教性	-1.5	0.40 (±1.20)	0.01 (±0.92)
死を受け入れる気持ち	1.3	NA	NA

先行研究同様、「命への感謝」や「霊性」について増加が見られる一方で「世俗的成功への関心」に減少が見られる。また、宗教性（特に組織的な特定の宗教と結びついた）の減少は、Goza et al. (2014)やSchneeberger (2010) では顕著ではないが、Atwart (1988)、Flynn (1982; 1986)、Grey (1985)、Ring (1980; 1984)らによって指摘されてきた傾向である<sup>9)</sup>。また、項目6、29、31、36、42の中で項目36（「生まれ変わり」を受け入れる気持ちは）の数値が「著しく増加（2点）」である点は注目に値する。

### 3.3. 死後交信

2011年の東日本大震災以降、一般向けの書籍においても、遺族が故人と交信したという記録が多数報告されるようになった<sup>10)</sup>。死後交信（After-Death Communication, ADC）と呼ばれるこのような体験は古くから考察の対象とされており、体験者の数も相当数にのぼることが知られている。死後交信研究のシステマティック・レビューを行った Streit-Horn (2011) によれば、28の研究報告における出現頻度は2パーセントから88パーセントと大きな開きがあるが、ランダムに抽出されたサンプルに基づく信頼度の高い研究の中でも Kalish and Reynolds (1973) の44パーセント（サンプル数は434）や Haraldsson et al. (1977) の31パーセント（サンプル数は902）、Mack and Powell (2005) の29パーセント（サンプル数は368）のように、比較的高い数字を示しているものが多く、かなり一般性の高い現象であることが示唆されている<sup>11)</sup>。

柴田氏も死後交信を多数体験しているが、そのきっかけは臨死体験であり、交信の内容は死者の声を聞く霊聴体験が多いとのことである。たとえば、最愛の父親が他界した後、喪失感を埋めようと、兄が買い与えた絵画セットを携えて、屋外で写生を行っていた時期があったが、そんな時、父親の声をよく聞いた。その後も、人生の節目、節目で助言のように父親の声を聞くことがあったとのことである。霊聴は父親に限らず、看取った方からのものであったり、前述の「愛こそが生きる意味だ！」といういわば神的存在からのものであったりするが、中には身近な人物の病状の軽減につながるような的



確な助言の場合もあるという。臨死体験をきっかけに霊媒的な能力を開花させる例は少なくないが<sup>12)</sup>、柴田氏の場合もそのような例の一つとして考えることができるであろう。

#### 4. 柴田久美子氏の再会体験

再生型事例 (Case of the Reincarnation Type) においては、当事者の過去生記憶に相当する人物が特定された場合を「既決事例 (solved case)」、特定されていない事例を「未決事例 (unsolved case)」と呼び区別している (Stevenson, 2001)。バージニア大学知覚研究所で構築されている再生型事例データベース (2019 年版を用いた筆者自身の調査) では前者は 69.8 パーセント (1570/2247)、後者は 30.1 パーセント (677/2247) となっている。既決例の中の 44 パーセント (697/1570) においては、過去生の人物の家族あるいは過去生の人物と近い人物が「故人の生まれ変わりである」として当事者を受け入れている。

興味深いのは、当事者が過去生記憶を語っていないにもかかわらず、故人の関係者が振る舞いや身体的特徴といった状況証拠から当事者を故人の「生まれ変わり」とみなしている例が少数ながら存在することである。前述のデータベースでは、そのような事例は 35 例記録されている。柴田氏の再会体験もそのような事例の一つと言えるであろう。

氏の体験があったのは、2016 年、5 月、カナダのブリティッシュ・コロンビア州においてであった。この年、現地のレンタル形式のバケーション・ホーム Victoria Garden Estate で看取り士の資格取得を希望する海外在住者を対象とした講座が開催された。期間は 5 月 20 日から 5 月 27 日の 8 日間。養成講座のスケジュールは、表 5 の通りであった。この時の出来事については、講師として参加していた西河美智子氏と Y 氏、そして講座参加者のピーターソンめぐみ氏、Eithan 君とその父親にインタビューし、内容を確認している。

表 5. 2016 年にカナダで開催された看取り士養成講座<sup>13)</sup>

内容	日付
柴田久美子氏講演会	5月20日
看取り学講座・初級	5月21日午前
看取り学講座・中級	5月21日午後
1日胎内内観	5月22日
看取り士養成講座	5月23日～27日

研修中の柴田氏の宿泊先は研修場所から 7.2 キロほど離れた Days Inn by Wyndham Victoria Airport Sidney というホテルであった。おそらく 5 月 20 日のことだと思われるが、柴田氏は、研修所である Victoria Garden Estate に向かうタクシーの中で父親から「自分はカナダで、5 歳の子供として生まれ変わっている」とのメッセージを受け取った。この時の研修に講師として参加していた看取り士の西河美智子氏は、柴田氏と同乗したタクシーがとある場所に差し掛かった時、柴田氏から「実はここで父親からこんなメッセージを受け取ったとの」と告げられたことを記憶している。柴田氏がその体験について養成講座の講師数人に話したところ、講師の間では、研修期間中にその子供との出会

いがあるのではないか、ということが話題となった。

そして5月22日、20人ほどの養成講座の参加者たちは胎内内観のために約3人ずつに分けられ、それぞれが胎内に見立てられた、パーティションで区切られた狭い空間に座り、自分と向き合う時間を持った。一方、講師の役割は、定期的に参加者の元を訪れ、胎内内観によって得られた体験に耳を傾けることであった。訪問と訪問の間の時間、講師たちは柴田氏と同じ部屋で情報交換を行っていたが、眠気を覚えた講師の一人のY氏が外の風に当たろうと庭に出たところ、突然強い風が吹き始めた。Y氏の後を追うように庭に出てきた講師の一人が「神風が吹いた！」と声を上げたかと思うと、庭で遊んでいた5歳くらいの男の子が柴田氏のところに駆け寄って来て抱きついた。図1がその時の写真である。



図1 柴田氏とEithan君

柴田氏はその子供が父親の生まれ変わりであることを強く確信し、その場にいた講師たちの何人かは奇跡的な「再会」がなされたことに驚きを隠せなかった<sup>14)</sup>。

柴田氏と同乗したタクシーの中で父親からのメッセージについて聞いていた西河美智子氏は、柴田氏と他の講師たちが既に外に出た後で講師達のいた部屋に入ったが、戻って来た柴田氏の歓喜に溢れる姿と感動の声を上げる他の講師達の姿を記憶している。また、講座の参加者でこの出来事が生じた時に胎内内観を行っていたピーターソンめぐみ氏は、この日、講師として内観時の体験に耳を傾けるために自分の元を訪れた柴田氏の様子に驚いたという。パーティションで区切られた空間に座っているため、講師が部屋に入ってきて気づくことはなかったが、「再会」の後に柴田氏が入ってきた時にはそれまでとは全く異なる強烈なエネルギーを感じたとのことである。

研修所である Victoria Garden Estate で柴田氏のもとに駆け寄った男の子 (Eithan 君) は、その場所のオーナーの息子で、家族と一緒にそこを訪れることがよくあった。インタビュー時には Eithan 君は 14 歳になっており当時の出来事の詳細はほとんど記憶していなかったが、柴田氏に抱きついて高揚感を感じたことは強く印象に残っているという。また、Eithan 君は当該の場所では数多くの利用者・宿泊者に出会ったが、駆け寄り抱きつくという行為をしたのは柴田氏に対してだけであり、その意味で特別な存在だと認識したのは間違いのないことであった。

柴田氏に、Eithan 君との出会いを、どの程度強く父親との「再会」であると確信したかについて、「とても弱い確信」「弱い確信」「中程度の確信」「強い確信」「とても強い確信」の 5 段階で尋ねたところ、「とても強い確信」との回答であった。また、その時以降、以前にも増して心の中に父の存在を感じ、距離感がなくなったとのことである。

柴田氏の事例は、過去生の人物の家族側が「生まれ変わり」を確信した人物と出会い、時空を超えた「魂の絆」を感じるという大変印象深い体験をした、という点で特殊ではあるが重要な事例だと言えるであろう。また、これまでは当事者の発言や振る舞いといった視点からの過去生の人物の特定が再生型事例の調査における焦点の中心であったが、柴田氏の事例は、過去生の人物に近い人物の「確信度」という観点からも事例を調査することが可能であることを示しており、その点でも貴重な事例と考えることができるであろう。

## 5. 結語

以上、本稿では臨死体験をきっかけとし、看取り士の養成という前例のない道を切り開いて来た柴田久美子氏について、臨死体験の内容およびその後の影響を中心に報告した。また、死後交信および再生型事例という観点から、氏がその後に体験した父親との「再会」についても述べた。多死社会を迎えた日本において看取り士の果たす役割は非常に大きい、看取り士誕生の背景に臨死体験があったことは記録されるべき重要な事実であろう。

## 注

1. それぞれの方の臨死体験については辛酸・寺井 (2017; 2018) とそこに挙げられている文献を参照のこと。

2. 一般社団法人看取り士会の web ページは以下の通り。 <https://mitorishi.jp/>
3. 看取り士の仕事については、以下の web ページを参照のこと。  
<https://mitorishihaken.jp/> また、看取り士の果たす重要性に関する論考については藤 (2020)を参照。
4. 筆者は、2017年11月11日に岡山で開催された「勇者の祭典」で氏と出会って以来、対談や鼎談およびその前後で氏と話をする機会に恵まれた。以下の氏に関する記述は、その折に氏から聞いた話や、その後の複数のインタビュー、SNSでのやり取り、氏自身の著述(柴田, 2013; 2018; 2019)、(柴田・船井, 2014)や氏に関する著述(おおもり, 2022)に基づいている。ただし、本稿の内容については、いずれもインタビュー時に柴田氏に確認をしている。
5. 出雲大社教については、以下の web ページを参照。  
<http://www.izumooyashirokyo.or.jp/>
6. 中でも劇的な事例として、進行性がん(ホジキンリンパ腫)が原因で昏睡状態に陥り30時間生死を彷徨っていた時に臨死体験をした Anita Moorjani 氏の例がある(Moorjani, 2012)。
7. 臨死体験尺度については、それが発表され広く用いられるようになってから20年ほどして、その有効性に疑問を持った統計学者の Rense Lange と心理学者の Jim Houran によって Rasch Model を用いた検討がなされた。その結果、尺度として正当であることが確認されている Lange et al. (2004)。
8. この時点では Life Changes Questionnaire (LCQ)と呼ばれていた。また、LCQ を用いた研究を最初に発表したのは Flynn (1982)である。
9. ただし、Sabom (1998)が指摘するように、研究参加者の背景によって結果が大きく異なる可能性があり、この点はさらなる検討が必要である。
10. たとえば、宇田川 (2016)、奥野 (2017)、金菱編 (2018)、ロイド・パリー (2018)がある。
11. Beischel (2019) は、交信のきっかけを、spontaneous、facilitated、assisted、requested の4つに分けているが、先行研究の多くは spontaneous な事例が中心である。
12. たとえば Greyson (1983b) は臨死体験者を対象とした調査において、死後交信体験の割合が11.6パーセントから27.5パーセントに増加したと報告している。同様の研究として Sutherland (1989) も参照のこと。
13. 3日目の22日に行われた「胎内内観」とは、福岡の内観道場「感性塾九州」代表の甲斐高士氏に師事し、自身も10回以上の内観を行った柴田氏が、内観の経験と看取りの経験を組み合わせて作り出した手法であり、以下の特徴を持つという点で通常の内観とは異なっている。すなわち、(i)胎内での体験を味わう、(ii)特に母親との繋がりを重視する、(iii)相手の立場になりきって過去を体験する、(iv)喜びの体験を中心に思い出す、の4点である。
14. ただし、当時、Eithan 君は6歳5ヶ月で、柴田氏が受け取ったメッセージの「5歳」とは食い違っている。

## 謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです(課題名:「Spiritually Transformative Experienceに関する研究」、承認番号:280114)。調査にご協力いただいた柴田久美子氏、西河美智子氏、ピーターソンめぐみ氏、Y氏、Eithan君とそのお父様、英文の校閲をしてくださった Gregory Shushan 氏および Editage に厚く御礼申

し上げます。

## 参考文献

- 宇田川敬介 (2016) 『震災後の不思議な話 三陸の怪談』 東京：飛鳥新社。
- おおもりくうた (2022) 『少年 X (エックス) —忘れられた魂に捧ぐ—』 丹波：あうん社。
- 奥野修司 (2017) 『魂でもいいから、そばにいて— 3.11 後の霊体験を聞く—』 東京：新潮社。
- 金菱清編 (2018) 『私の夢まで、会いに来てくれた—3.11 亡き人とのそれから—』 東京：朝日新聞出版。
- 柴田久美子 (2013) 『幸せな旅立ちを約束します 看取り士』 東京：コスモトゥーワン。
- 柴田久美子 (2018) 『私は看取り士。わがままな最後を支えます』 東京：佼成出版。
- 柴田久美子 (2019) 『この国で死ぬということ』 東京：ミネルヴァ書房。
- 柴田久美子・船井勝仁 (2014) 『命の革命—恐怖を超え、死の扉を開く—』 姫路：きれい・ねっと。
- 辛酸なめ子・寺井広樹 (2017) 『辛酸なめ子と寺井広樹の「あの世の歩き方」』 東京：マキノ出版。
- 辛酸なめ子・寺井広樹 (2018) 『辛酸なめ子と寺井広樹の「あの世の歩き方」裏道マップ』 東京：マキノ出版。
- 藤和彦 (2020) 『人は生まれ変わる—縄文の心でアフター・コロナを生きる—』 東京：ベストブック。
- ロイド パリー、リチャード (2018) 『津波の霊たち—3.11 死と生の物語—』 東京：早川書房。
- Atwater, P. (1988). *Coming Back to Life*. New York: Ballantine.
- Beischel, J. (2019). Spontaneous, Facilitated, Assisted, and Requested After-Death Communication Experiences and their Impact on Grief. *Threshold: Journal of Interdisciplinary Consciousness Studies*, 3(1), 1-32.
- Flynn, C. P. (1982). Meanings and Implications of NDEr Transformations: Some Preliminary Findings and Implications. *Anabiosis: The Journal of Near-Death Studies*, 2, 3-14.
- Flynn, C. P. (1986). *After the Beyond: Human Transformation and the Near-Death Experience*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Goza, T. H.; Holden, J. M.; Kinsey, L. (2014) Combat Near-Death Experiences: An Exploratory Study. *Military Medicine*, 179, 1113-1118.
- Grey, M. (1985). *Return from Death*. London: Arkana.
- Greyson, B. (1983a). Near-Death Experiences and Personal Values. *American Journal of Psychiatry*, 140, 618-620.
- Greyson, B. (1983b). Increase in Psychic Phenomena Following Near-Death Experiences. *Theta*, 11(2), 1-29.
- Greyson, B.; Ring, K. (2004). The Life Changes Inventory-Revised. *Journal of Near-Death Studies*, 23(1), 41-54.
- Haraldsson, E.; Gudmundsdottir, A.; Ragnarsson, A.; Loftsson, J.; Jonsson, S. (1977). National

- Survey of Psychical Experiences and Attitudes Towards the Paranormal in Iceland. In Morris, J. D.; Roll, W. G.; Morris, R. L. (eds.), *Research in Parapsychology 1976*, 182-186. Metuchen, NJ: Scarecrow Press.
- Kalish, R. A.; Reynolds, D. K. (1973). Phenomenological Reality and Post-Death Contact. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 12(2), 209-221.
- Lange, R.; Greyson, B.; Houran, J. (2004). A Rasch Scaling Validation of a 'Core' Near-Death Experience. *British Journal of Psychology*, 95, 161-177.
- Mack, J.; Powerll, L. (2005). Perceptions of Non-local Communication: Incidences Associated with Media Consumption and Individual Differences. *North American Journal of Psychology*, 7(2), 279-294.
- Moorjani, A. (2012). *Dying to Be Me: My Journey from Cancer, to Near Death, to True Healing*. Carlsbad, CA: Hay House.
- Ring, K. (1980). *Life at Death: A Scientific Investigation of the Near-Death Experience*. New York: Coward, McCann & Geoghegan.
- Ring, K. (1984). *Heading Toward Omega: In Search of the Meaning of the Near-Death Experience*. New York: William Morrow.
- Sabom, M. (1998). *Light and Death: One Doctor's Fascinating Account of Near-Death Experiences*. Grand Rapids, MI: Zondervan.
- Schneeberger, S. (2010). *Unitive/Mystical Experiences and Life Changes*. Doctoral dissertation, University of Northern Colorado.
- Southerland, C. (1989) Psychic Phenomena Following Near-Death Experiences: An Australian Study. *Journal of Near-Death Studies*, 8(2), 93-102.
- Stevenson, I. (2001). *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation*, revised edition. Jefferson, NC/London: McFarland & Company.
- Streit-Horn, J. (2011). *A Systematic Review of Research on After-Death Communication (ADC)*. Doctoral dissertation, University of North Texas.